

人生は  
決まり  
文句

## 山に雪が、人に齡が

小長谷 有紀

(こながや ゆき)

本館研究戦略センター

### ライフヒストリー

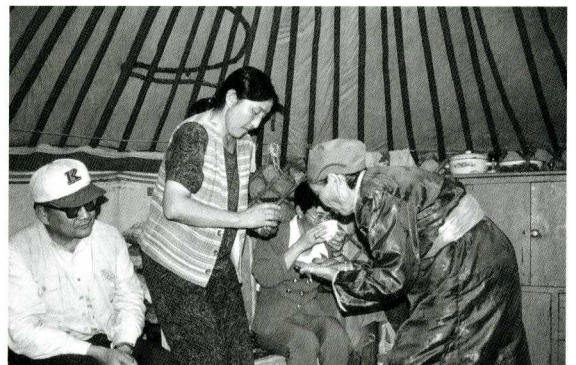
二〇〇二年の夏、わたしは中国内蒙古自治区の最西端にあるエズネーに赴き、年老了いた女性たちばかりを訪ねて回っていた。おばあさんたちからその人生を語ってもらい、それを聞き書きするという仕事を始めたのである。

一般にこうした語りはその内容から「ライフヒストリー」とよばれる。語りはそもそも歴史のすべてではなく、いくつかの事象を選んで再構成する物語であるから「ライフストーリー」とよばれることもある。

一九二〇年代、三〇年代生まれの彼女たちは、子どものころに社会主義革命を体験し、壮年期に文化大革命を経験し、現在は飛躍的な経済発展を目的の当りにしている。人生の途上で彼らが得たものは多いが、失ったものも大きい。例えば、文化大革命という社会変動は人倫への信頼を破壊した。一方、開発という社会変容は、砂漠を潤してきた水環境を今も圧倒的な力で破壊しつつある。そうした破壊現象はつとに有名であり、それゆえに「こちらが求めている調査事項なのである。」

### 見えてくる生きざま

ただし、本当に大切なことはそうした情報収集活動の外側にあるとわたしは思う。だからわたしは彼らを「インフォーマント



中国内モンゴル自治区アラシャン盟エズネーでの聞きとり風景



祁連山(きれんざん)の水河は夏に溶けて黒河に注ぎ、あるいは地下水となってエズネーを潤してきた

(情報提供者)とはよばない。わたしの知らない時空について、自ら生きた人の経験としてナマのことはでわけてもらうというの

は、たいそうせいたくな「ちこそであつて、一緒に泣いたり笑ったりする時間がそこにあることが至福のように思われる。さらにまた、問答の向こう側に、彼らの生きざまや社会のありようが見えてくる。たとえば、「母が生きていたとき、その面倒を見ることができませんでした。亡くなったあとにも祈禱をただけで、葬式に加わることができませんでした。一生、残念に思います。その代わり、姑についてはわたしが十分に世話をしました」

「自分の子を養子に出したり、ほかの人から養子をもたらしたりする場合がたくさ

んあります。子どもなら、産んだ子ももつた子も同様に扱います。子どもを育てるといことは、自分が産んでも、人からもらつても同じですよ」

現代のように医療や福祉について制度依存できなかったとき、人びとは相互に築くネットワークで負担を分散してきたのだ。個人がたくさんの他人とともに生きることによつて、社会全体が自立していたのである。

彼女たちが好んで使うことわざに、「山に雪が、人に齡が」という表現がある。「降り積もる」という動詞が省略されることによつて、意味の重みはいや増す。山に雪は美しい、その風景を思い起こせば、年齢を隠す化粧など要らないだろう。